

〔醒睡笑四〕日のあるあひだを晝といひ、日のいりて後を夜といふは、いかさま仔細あらんやとおもひ、我が折角思案して、いとしあてたはとかたる、なにと工夫したぞ、○中日ひんがしにかがやけば、そめやはそめてかけぬる者はぬりてほし、きたなき物をもあらひてほすに、いづれものこらすひるほどに、さてなむひるとはいふ物よと。

〔東雅一文〕晝ヒル略○中 晝、ヒルといふ、ヒは日也、ルは語助なり、日の中する義なるべし。

〔倭訓栞比前編二十五〕ひる 神代紀に日をよめり、晝も同じ、日をはたらかしたる詞也、又日中をさ

していへり、伊勢物語にも見えたり、武備志に午をよめる是也。

〔和爾雅二歳時〕晝分チヤブ 晌午シヤウ 亭午テイゴ 日在亭中日在亭中 白晝ハク 通日通日 終日シウジツ 彌日ビ

晝日 移日 日旰カシ 日景ニツケ 日昃ニツセキ 終晷シウク 卓午タクゴ 薄午ハクゴ

〔書言字考節用集二時候〕白晝ハク 晝買チヤウ 晝策チヤク 註、日ニツ 晝時チヤウジ

〔日本書紀二神代〕一書曰、略○中 高皇産靈尊勅八十諸神曰、葦原中國者、磐根木株、草葉猶能言語、夜者若

燦火而喧響之、晝者如五月蠅而沸騰之云々。

〔枕草子一〕冬は雪のふりたるはいふべきにもあらず、霜などのいと玄ろく、又さらでもいとさむき、火などいそぎおこして、すみもてわたるもいとつきくし、ひるになりてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火おけの火も、玄ろきはいがちになりぬるはわろし。

〔古今和歌集十三戀三〕題玄らす ぎよはらのふかやぶ

みつしほのながれひるまをわひがたみみるめのうらによるをこそまて

〔類聚名義抄二晝日〕ヒメモスニニ 終日ヒメ 同ムスニニ

〔書言字考節用集二時候〕終日シウジツ 竟日キョウジツ 晝日チヤウジツ 終晷シウク 終日シウジツ 晝日チヤウジツ

〔倭訓栞比前編二十五〕ひねもす 終日、又晝日シウジツ をよめり、日目もさながらてふを略す、今も日の目て